# 経験から学んだことや将来への思いを言葉に…
# 健全育成主張大会・標語表彰

第27回只見町青少年健全育成主張大会および健全育成標語入賞者表彰式が、2月24日に季の郷湯ら里で行われ、発表者は日頃の経験から学んだことや将来への夢や希望、普段考えていることなどを気持ちを込め熱く語り、その姿に感動の拍手が送られました。

▲主張大会発表者と標語入賞者のみなさん

主張大会では、小学生3名、中学生3名、高校生2名が、今思っていること感じていること、体験したことなどを心を込め発表しました。その熱い思いが約150名の来場者に伝わり、発表者の言葉に感動されていました。

続いて行われた標語入賞者表彰式では、青少年健全育成町民会議会長の目黒町長が、出席された入賞者一人一人に賞状と記念品を贈りました。標語には270点の応募があり、どれもすばらしい作品ばかりでした。

主張大会での発表内容と、標語の入賞作品を紹介します。ぜひ、ご覧いただき、健全育成の活動にご理解とご協力をお願いします。本事業は、町民の皆さんからの協賛金により実施されています。

なお、同日に同会場で平成24年度芸術文化賞・スポーツ優秀選手賞・町民文芸コンクール表彰式も行われました。この内容については、4月号で紹介します。

## 標語入賞作品

（敬称略）

| 部門 | 賞名 | 標語 | 所属 | 氏名 |
|---|---|---|---|---|
| 小学生の部 | 優秀賞 | 言われても　言ってもうれしい「ありがとう」 | 只見小学校 | 大塚琴美（おおつかことみ） |
| | 佳作 | 協力と　笑顔でつながる　只見の輪 | 只見小学校 | 川合未来（かわいみらい） |
| | 佳作 | 只見町　みんなのふるさと　自然首都 | 朝日小学校 | 渡部美依（わたなべみい） |
| | 佳作 | かなえたい　夢を大事に　一歩ずつ | 明和小学校 | 菊地みずき（きくちみずき） |
| | 佳作 | 雪げしき　きれいが自慢だ　只見町 | 明和小学校 | 布沢陽斗（ふざわはると） |
| | 佳作 | 只見町　守っていくのは私達　歴史・自然・地域の輪を | 明和小学校 | 会田未夢（あいたみゆめ） |
| 中学生の部 | 優秀賞 | どんなことも　負けてたまっか　只見町 | 只見中学校 | 島谷拓実（しまたにたくみ） |
| | 佳作 | 思いやり　人と人とを　つなぐもの | 只見中学校 | 山内綾（やまうちあや） |
| | 佳作 | あいさつと　笑顔の架け橋　かけようよ | 只見中学校 | 飯塚健太郎（いいづかけんたろう） |
| | 佳作 | 父母の　がんばる姿に　金メダル | 只見中学校 | 渡部滉太（わたなべこうた） |
| | 佳作 | つなげよう　感謝の気持ち　明日へと | 只見中学校 | 吉津千晶（きつちあき） |
| 高校生の部 | 優秀賞 | あいさつは　心育む　第一歩 | 只見高等学校 | 星ひかり（ほしひかり） |
| | 佳作 | 夢咲かす　憧れ胸に　未来へと | 只見高等学校 | 渡部夏芽（わたなべなつめ） |
| | 佳作 | おはようと　言える家庭に　非行なし | 只見高等学校 | 齋藤雄（さいとうゆう） |
| | 佳作 | ダメな事　「ダメ」と言って　くれる友 | 只見高等学校 | 五十嵐愛（いがらしあい） |
| | 佳作 | 人の手と　心をつなぐ　ボランティア | 西郷養護学校高等部 | 渡部安菜（わたなべあんな） |
| 一般の部 | 優秀賞 | 輝ってる　ほめて伸ばそう　きみのよさ | 蒲生 | 田中ケイ子（たなかこ） |
| | 佳作 | 帰り待つ　夕げ楽しい　母の味 | 只見田中 | 菅家ミヨ子（かんけこ） |
| | 佳作 | 不便こそ　生き抜く力　見え出せる | 黒谷 | 原田まれ（はらだまれ） |
| | 佳作 | 只見っ子　みなぎる力　未来へと | 小林 | 石倉智幸（いしくらともゆき） |

# 今までの自分は超えられる

只見小学校6年
酒井（さかい）　康志（こうし）くん

ぼくは、走ることがあまり得意ではありません。特に、長きょり走は、つらく、苦しい思いをするので、きらいな種目でした。

でも、今は違います。今までの自分を超えることができたからです。それは、こんな経験です。

五年生の時のことです。毎年行われている体育交歓会に、高学年となったぼくも、只見小学校の代表として参加することになりました。練習が始まる前に、出場する種目を決めなくてはなりません。ぼくは、どの種目にしようか、迷っていました。すると、先生から、

「康志は、マラソンが苦手みたいだから、逆に千メートル走をやって練習してみたらどうだ。」

と言われたのです。

その時は、千メートル走なんて、いやだなあと思いました。しかし、先生にすすめられたことで、少しだけやってみたいという気持ちも生まれてきました。なぜなら、高学年になったので、何か一つ、チャレンジしてみたいと以前から思っていたからです。

大会へ向けて、たくさん練習をしました。走り続けると、やはり息が苦しく、何度もやめたいと思いました。でも、自分で決めたことだからと何とかやり通し、体育交歓会当日を迎えました。結果は、最下位でした。とてもくやしくて、もう来年は絶対千メートル走はやらないと決めました。

そして六年生、また体育交歓会に出場する種目を決めるときがやってきました。前年のことがあり、今年は、百メートル走にしようと思っていましたが、本当にそれでいいのかという気持ちも残っていました。去年、あれだけがんばったのに、にげだすような気がしたのです。結局、先生のすすめもあり、もう一度、千メートル走に挑戦することにしました。

それから一ヵ月、ぼくは本気で練習に取り組みました。インターバル走や十分間走、練習はやっぱりつらくて苦しく感じました。でもぼくは、最後の体育交歓会を悔いのない大会にしようと思い、がんばりました。タイムも縮まっていきました。そのことが力になり、ますます練習に身が入りました。

そしていよいよ体育交歓会当日がやってきました。次々と競技が進み、ついに千メートル走の種目が始まりました。スタートの合図とともに、ぼくは勢いよく走り始め、先頭集団につけました。同じ学校の友達や先生、保護者の方々の声えんが後おしをしてくれ、前半はいいペースで進みました。しかし後半、つかれとともにだんだん追い抜かれて順位を下げてしまいました。そしてゴール。終わってみると、出場した六年生の中では、最下位になっていました。走り終わったとき、ぼくは、

「ああ。また去年と同じだ。」

と思いました。でも、自分の中では、以前の自分よりもずっと力は伸びているはずだという手ごたえを感じていました。ぼくは、三週間後に行われる校内マラソン大会へと気持ちを切りかえることにしました。これが最後の挑戦のチャンスでした。

以前のぼくだったら、友達としゃべりながらゆっくり走っていた朝のマラソンも、一人でしっかりと走りました。

そして小学校生活最後のマラソン大会。六年生男子が走り出しました。スタートから、友達数人との接戦になりました。校庭へもどってきて、あと二百メートルとなったときも、まだ自分をふくめて三人の先頭争いが激しく続いていました。ぼくは、最後に残っていた力を出しきり、ゴールラインをかけぬけました。結果は、一位と胸の差で二位でした。でもくやしさはありません。今までの最高順位の記録をこう新することができたからです。

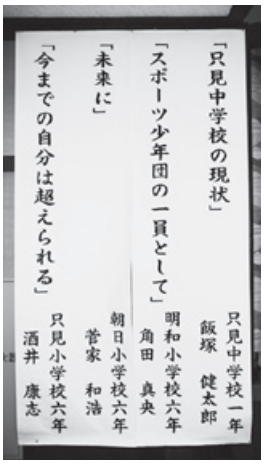
「今までの自分を超えられた。」

このとき、ぼくはこう思いました。

この二年間の、長きょり走への挑戦は、努力すれば必ず自分の力になるということをぼくに教えてくれました。しかし、ここまでがんばれたのは、自分一人だけの力ではありません。一緒に練習し、はげまし合った仲間、応えんして下さった先生方、そして、家族の支えがなくては、と中であきらめてしまったかもしれません。周りの人たちとの関わりが、ぼくにとって一番大きな力になりました。

これから先、つらいことや苦しいこともあると思います。けれども、体育交歓会での二年間の経験を思い出し、あきらめることなく、必ず乗りこえられると信じて、チャレンジしていこうと思います。

「これからも、今までの自分を超えてみせるぞ。」


「只見中学校の現状」　只見中学校一年　飯塚　健太郎
「スポーツ少年団の一員として」　明和小学校六年　角田　真央
「未来に」　朝日小学校六年　菅家　和浩
「今までの自分は超えられる」　只見小学校六年　酒井　康志

# 未来に

朝日小学校6年
菅家（かんけ）　和浩（かずひろ）くん

「おぉぉー。」

北京オリンピック、ロンドンオリンピックにビーチバレー日本代表の朝日健太郎さんが、朝日小の体育館に入ってきました。身長は百九十九センチメートル。あと一センチで二メートルです。どうやったらそんなに背が伸びるのだろう。建物を見上げているようでした。

バレーボールの練習が始まりました。レシーブの形を教えてもらいました。親指を下に向け、ひじを固める。その形のまま走り、ボールを返す。相手のいる所に正確に返すのは難しいことでした。練習をしてうまく返せるようにしたいと思いました。

「わぁぁー。」

なんと、朝日さんがオーバーで上げたボールが朝日小の体育館の天井にあたったのです。健さんは笑顔でピースサインをしていました。

バレーの授業が終わるころ、健さんから宿題が出ました。

「五、六年生全員で二十四回パスをつなげてほしい。」

と。僕はちょっと不安になりましたが、チャレンジし、できるようにしようと思いました。

五時間目は朝日っ子ルームで健さんによる心の授業です。なぜそんなに背が高いのか。わけはよく寝ることと言っていました。

「実は子どものころ、運動が苦手でした。」

「えぇー？。」

健さんの言葉にみんな声をそろえておどろきました。健さんは小学校のころはサッカーをやっていて、中学生になりバスケをやろうとしたそうです。でもきつそうだったからバレー部に入ったのだとのことでした。そして、北京オリンピックではビーチバレーの日本代表になり一回戦を突破したのです。屋外の砂のコートで、二人対二人でやるビーチバレーを、僕もやってみたくなりました。

さて、次の日から宿題の練習が始まりました。レシーブはうでを振らずにひじを固め、送り返すイメージ。オーバーは、十本の指でボールを包むようにし、手はおでこの前におく。すばやくボールの正面に入り、ひざを使うのを意識して、相手の打ちやすい所に返す。声を出し、二十四回つなぐ。朝も、昼休みも、体育の授業でも練習に励みました。

五、六年生でつないだ最高記録は十八回。二十回以上つなげたかったのですが、なかなかいかないのです。六年生だけで練習をした時、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五。ついに成功。じいんとしました。でも五、六年生二十四人で一回ずつつないだのではないので本当の成功とは言えません。でもこれで、成功する可能性を感じました。

健さんが宿題の成果を見に、もう一度朝日小に来てくれた本番の時。五、六年生全員二十四人で円陣を組みました。

「二十四回つなぐ。」「二十四回つなぐ。」

「あきらめない。」「あきらめない。」

「朝日。」「朝日。」

「ファイト　オー。」

一つのボールを一人一回ずつ、アンダーやオーバーでレシーブ、パス。二十四人あきらめません。でも、ボールは手の届かない所に飛び、床に落下。

「チャンスは、あと十回な。」

と健さん。でも十四回までつなぐのがやっとで挑戦は失敗で終了でした。うつむくみんなの目から涙がこぼれました。すると健さんが

「じゃあ、おれと一緒に二十四回つなごうよ」

と言ってくれました。健さんはゼロと数え、ぼく達のボールを毎回受け止めて返してくれたのです。あきらめず次の挑戦です。

「一、ゼロ、二、ゼロ、三、ゼロ、・・・。」

数回やりなおし、ついに二十四回成功。やったあ、と思いきや健さんが、

「今度は、おれの分も数えて、百回つなごう」と言いました。百回なんて、みんな二回ずつやらないとできないのに、でも、できそうな予感がわいてきました。

「一、二、三、・・・。」

すばやくボールの正面に入り、ひざを使うのを意識して、相手の打ちやすい所に返す。百回の挑戦の始まりです。

「・・・三十三、三十四、・・・八十七、八十八、・・・九十五、九十六、・・」

なんか不思議なパワーが朝日小の体育館にみなぎりました。そして、

「九十九、百。」

ついに百回つなぐことに成功したのです。これは、五、六年生と健さんが失敗してもあきらめなかったからできたことでした。

ぼくはまだ、将来自分がどのような仕事をするかを選べないでいます。でも、今回朝日健太郎さんに教えてもらった失敗してもあきらめない心と、相手のことを考えてパスを返しつない

# スポーツ少年団の一員として

明和小学校６年

角田（つのだ）　真央（まお）さん

五年間続けてきた大好きなバレーボール。卒業を控え、明和スポーツ少年団を退団した今、さみしい気持ちがたくさんこみあげてきます。

しかし、一つのことを長く続けることができた満足感と、自分の心や体がバレーボールを通して大きくなった充実感があります。監督やコーチの皆さん。私の両親。そして、いつも一緒だったチームの仲間達。また、この五年間に関わった相手チームも含め、たくさんのお世話になった皆さんに感謝して、五年生にしっかりバトンを渡しました。

私がバレーボールに興味をもち、スポーツ少年団に入団したのが五年前。運動はそれほど得意ではありませんでしたが、お母さん達が元気にバレーボールを楽しんでいる姿を見て、私もちょっとやってみようかなという程度の気持ちで入部しました。大きなお姉さん達のかっこいいプレーにあこがれをもちながら、二年生の私は、コートの周りでボール拾いに夢中になりました。

三年生になって背番号をもらい、ベンチに入れてもらえることになりました。試合はまだまだでしたが、六年生を見習って、練習を一生懸命に頑張った思い出があります。

四年生では、応援団長でもある背番号7番のユニフォームをもらいました。まだ試合に出場することはできませんでしたが、この番号を身に付けている以上、他の誰よりも大きな声で、そして声がかれるまで、応援をがんばりました。その声がコートの中のチームのみんなに届き、笑顔が返ってきた時、チームのみんなと一体になれた感じがしました。

レギュラーとして試合に出場できるようになったのが五年生の時でした。でも、カットが上手く上がらず、下級生にポジションを譲ってしまったこともあります。必死に練習を頑張りましたが、出てくるのは悔し涙ばかりでした。レギュラーが目標でしたが、現実はとても厳しいものでした。

六年生としてチームを引っ張った最後の一年間。一番印象に残っているのは、県大会出場を決めた一戦です。勝利の瞬間、私は仲間と一緒に跳び上がって喜びました。そして、涙があふれてきました。つらい練習に泣かされた日々。「もうバレーボールをやめたい」と、何度考えたことでしょう。六年生として期待されることもプレッシャーでしたし、一生懸命、指導や応援をしてくれる監督やコーチ、家族にも、申し訳ない気持ちになったこともあります。いくらやっても上手くならない自分が、情けなくなることが何度もありました。しかし、チームの一員として、今、私ができる精一杯の努力をし、それを乗り越えてきたからこそ涙が出てきたのだと思います。涙はいつまでも止まりませんでした。

ちょっとしたきっかけで始めたバレーボール。私は、なぜ続けることができたのでしょう。

先日のお別れ会では、大人の方や下級生と試合をして、とても楽しいひと時を過ごすことができました。この楽しさがバレーボールなのだと、初心に返ったような感じでした。

私は五年間、友達みんなとバレーボールをすることがとにかく楽しかったです。つらさも大きかったのですが、それよりも大きな楽しみがあり、続けてきたからこそ味わえた感動があったのだと思います。本当に、充実した五年間でした。

明和スポーツ少年団、バレーボール部のみなさん。本当にありがとう。

四月からは、新たな私の挑戦、中学校生活が始まります。私はこれからも、自分の夢や目標に向かって、着実に前進していきたいと思います。そのためには、どんなに苦しいことがあっても、明和スポ少バレー部で学んだことをもとに、何事もあきらめずに、一歩一歩前進していきたいと思います。

でいく心を未来にいかし、将来、多くのひとのためになる仕事をしている自分を夢みています。

▲主張大会発表者のみなさん

# 只見中学校の現状

只見中学校1年
飯塚（いいづか） 健太郎（けんたろう）さん

「自分の思っていることを『イエス』か『ノー』で答えてください。『今の只見中学校は乱れている。』」

こんな質問をされたら、皆さんはなんと答えますか。「イエス」と答える人は、たぶん少なくないと思います。もしも僕がこの質問をされたら、「イエス」と答えるに違いありません。自分でも思い当たる節はいくつかあるし、周りからもそういった言葉を聞くときがあるからです。

では、なぜ「乱れている」と感じてしまうのでしょう。それはきっと何気ない日常生活に原因があると思われます。

まず一つ目。それは「礼儀」です。今の只見中学校の生徒の中には、礼儀に欠けている人が少なからずいると思います。「礼儀」とは、先輩や先生、地域の方々など、目上の人に対してとても重要な行為です。最低限必要だと考える「敬語」でさえ、使っていない生徒を僕はときどき見かけます。そこでは、「○○だよ」とか、「○○でしょ」などといった、俗に言う「タメ口」が使われています。確かに親しい関係が築けている証拠かもしれないし、会話も楽しく弾むかもしれません。しかし、「親しき仲にも礼儀あり」という言葉があります。いくら仲がよくても、友達ではありません。先輩は先輩。先生は先生です。目上の人を敬うという姿勢をやはり大切にしていかなければならないのではないでしょうか。そこを改善していかないと、周囲からは「生意気」と思われ、それが「只見中学校は乱れている」という概念につながってしまう恐れもあります。最初の質問に「イエス」と答えた皆さんは、こういったことも一つの原因に挙げているのではないでしょうか。

そして二つ目。それは「服装」です。九月中旬に只見中学校の生徒会役員選挙が行われました。その中でも、何人かの立候補者が「服装」について口をそろえて言っていました。非常に小さなことかもしれませんが、Tシャツをズボンから出している生徒がいるということです。そのことについては校則でもしっかり入れることに決まっているはずです。ではなぜ、シャツを出してしまうのでしょう。そのことについては、生徒会役員選挙で、ある立候補者が演説にて言っていました。「シャツを出してもカッコイイものではない」と。そう。シャツを出している人はおそらく、「その方がカッコイイ」とか「シャツを入れるのはダサい」などといった考えのもと、やっているのでしょう。しかし、変にカッコつけてシャツを出している人より、そんな考え方を根本から捨て去り、きっぱりと否定したその立候補者の方が、何倍も何百倍もカッコイイと僕は思います。

そして、「服装」についてはもう一つ気になることがあります。それは「ジャージ登校」です。こういってしまうと聞こえが悪いかもしれませんが、制服で登校するという校則があるにもかかわらず、それを無視して登校するということです。この「ジャージ登校」は前に述べた「シャツ出し」よりずっと深刻だと考えます。なぜなら、「シャツ出し」は着替えたりした際、たまたましまい忘れたり、何か過激な運動をしてうっかり出てしまったり等ということも考えられます。ところが、「ジャージ登校」については、うっかりジャージできてしまったなんてことはまずあり得ません。それは会社にパジャマで行ったり、コップにご飯をよそったりするようなものです。つまり何が言いたいかというと、「シャツ出し」とは違い、「ジャージ登校」は「完全な悪意のもと」だということです。確かに、制服よりジャージの方が楽です。しかし「制服登校」は学校で決められたルールだし、そう大変なことではありません。それなのに守れない人がいるというのは絶対におかしいと思います。

今まで僕は只見中学校の生徒の短所ばかりを述べてきました。しかし、そのようなことをしているのはほんの一部。それ以外の人はしっかりとルールを守っているし、心の優しい人ばかりです。また、そのごく一部の人たちにだって長所はたくさんあります。よくはわかりませんが、僕は、よその学校の人たちに比べたら只見中学校の人たちは絶対にいい人たちばかりだと思います。優しい先輩方、気の合う友達、僕たちのことを真剣に考えてくださる先生方、僕たちのために様々な面で支援してくださる地域の方々。そんな中で生活している僕たちなのに、悪い評判が上がるのはとても残念です。日常生活の中にちょっとした「間違えた考え」が存在してしまっているのを何とかしていかなければならないと思います。

一人ひとりがその間違いに気づけたとき、最初の質問の「イエス」は少しずつ消えていきます。今の只見中学校の皆さんならそんな間違い、すぐに気づけるはずです。そしてすぐに「イエ

ス」はなくなります。誰も只見中学校は乱れているなんて言えなくなります。

皆さん見ていてください。只見中学校は「変わります」

# 何のために英語を学ぶのか

只見中学校２年

馬場（ばば）　真樹（まさき）さん

「学力」「学力」とよく叫ばれるこの世の中。今年から受験生となる僕たちには、これから先もずっと「学力」というものが必ずつきまとってくる。高校や大学に進学するにも、就職をするにも、当然「学力」は必要だ。生きていく上で「学力」は必要不可欠と言っていいほどだ。

しかし、そこまで重視させている「学力」について、僕は疑問に思うことがある。それは、「僕たち中学生はなぜ英語を学ぶのだろうか」ということである。

英語は多くの国や地域で使われ、世界の共通語として扱われている。海外に行ったときや、外国人と会話するときに使うには最も利便性に優れた言葉だと言っても過言ではない。しかし、僕たちは今中学生。普通の中学生が海外へ行くことなんてほとんどないだろうし、外国人と話す機会なんて滅多にない。それに僕たちが学ぶ英語なんて、所詮挨拶程度に過ぎないし、たとえ、中学生が学ぶべき英語を完璧に使いこなせたとしても、「英語を話せる」とは到底言えないだろう。だとしたら、僕たち中学生が英語を学ぶ意味などあるのだろうか。

もし、だれかにそんな質問をしたとしても、返ってくる答えはだいたい予想がつく。「将来のため」とか「受験のため」とか言うに違いない。より一層レベルの高い高校へ、よい会社に就職するための手段として受験は存在する。最終地点がなるべくいい場所であるための、ただの道選びのためでしかないのだ。それならば、受験に英語という科目はいるのだろうか。日本を出なければ、英語はあまり使われないだろうし、会社に就職したとしても、英語を必要とする職に就く人なんか半分もいないだろう。また、外国人の方だって、下手な英語を使われるより、絵やゼスチャーで表してもらった方がよっぽどわかりやすいに決まっている。

だとしたら、使うこともない英語を将来のためとか、受験のためなどという理由だけで学ばせるのはいかがなものだろうか。僕は、日本人に英語は不必要だと思うし、英語を学ぶ時間を他の教科の時間に当ててほしいとさえ思う。

しかし、ある時ふと考えた。僕の発想は本当にすべてが正しいのだろうかと。英語に限らず、言葉を学ぶということは難しい。日本人の僕が日本語を学ぶのだって、一苦労する。「話す・聞く」「書く」「読む」それぞれを学ぶことが言葉を学ぶということだと言える。これだけ様々な要素があるのだから、当然言葉を学ぶということは難しいに決まっている。こんなに難しいことを僕のような中学生が、好んで学ぶわけはない。しかし、言葉を学ぶということ、英語を学ぶということには次のような大きな意義があると僕は考える。目の前に道があったとしても、踏み出さなくては前には進めない。言葉や英語を学ぶことで、新たな道が切り開かれるかもしれない。一生出会うことができなかった人とも出会えるかもしれない。そう。限られた人生の中で、様々な可能性が広がるのだ。

そう考えると、英語を学ぶことが不必要、時間の無駄なんて言えない。言葉を学ぶことで自分の可能性がより広がり、学力までも高まる。そう。大切なのは理由なんかじゃなく、一歩前に踏み出し、いろいろなことを学ぼうとすることではないだろうか。

だから、僕たち中学生は英語を学んでいるのだ。

# 私の大好きなもの

只見中学校３年

日野（ひの）　涼（りょう）さん

突然ですが、私はとても飽きっぽい性格です。熱しやすく冷めやすい。まさしくそのとおりです。何かに夢中になっても長続きせず、しかも集中力も持続できません。

そんな私ですが、夢中になって取り

組むことができる、心から大好きだと言えるものが、最近になって見つけることができました。残りわずかとなった中学校生活の中でやっと見つけたもの。それは合唱です。正直そんなに歌もうまくないし、続ける理由なんかありませんでした。それでも一年生のときからずっと続けてきた合唱。

始めたきっかけは、一年生のとき、顧問の先生の部活動の説明を聞いて強い印象を受けたからです。

「合唱は誰でも、やる気さえあればできます。歌が下手だと思っている人でも、音痴が直ります。」

その言葉を聞いたとき、運動も勉強も苦手で、活躍の場があまりなかった私に希望の光が差しました。それで始めてみた合唱でしたが、嫌なこともたくさんありました。夏休みの練習は暑い中で行われます。立っているだけでも辛いのに、歌を歌っているとくらくらして倒れそうになります。夏休みが明けてからの練習は、昼休みに行われることもあり、ゆっくり休む暇もありません。練習では、先生に厳しい指摘を受けたり、先輩に怒られたりして、一年生のときは精神的に落ち込むこともしょっちゅうありました。その中でも一番辛かったことは二年生のとき、課題曲のレギュラーから外されてしまったということです。初めてできた後輩に、去年までいた自分のポジションをとられてしまったということがとてもショックでした。あまりの悔しさに家で泣いたこともありました。そんなこともあり、好きになりかけていた合唱を嫌いになってしまいそうな自分がいました。

そんなことがありながらも、私がこの合唱を三年間続けることができたのには理由がありました。それは、他の活動にはないある魅力があったからです。それは、学年に関係なく誰にでもできるという点です。特設部でもあるので、常設部を引退した三年生も参加することができます。しかも学年の垣根を乗り越えて、一年生から三年生が一つになれる。そしてみんなの心が一つになったとき、人を感動させられるような合唱に仕上がるのです。歌で人を感動させられるというのは本当に素晴らしいことだと思います。

そして私は今年、アルトパートのリーダーになりました。先生に声をかけていただいたときは「自分には無理だ」と正直思いました。でも、自分が味わった辛い思いを後輩たちにはさせたくない。心から合唱を好きでいてもらいたいという気持ちからリーダーを引き受けることを決めました。それからは、どうすればみんなが楽しみながら練習できるかを真剣に考えました。はじめはうまくいかず、後輩にきつく当たってしまうこともよくありました。うまくいかず、一人で泣いたこともありました。それでもみんなが楽しく活動できるよう毎日毎日考えました。そこで思ったことが、「自分が本気でぶつかれば、相手も本気でぶつかってきてくれる」ということでした。とにかくみんなを信じて、私は本気でぶつかりました。すると、次第に先生から褒められたり、全パートの練習でも自信を持って歌えるようになっていきました。そしてついには合唱部全体の雰囲気も、やる気もいい方向へ変わっていったのです。

そして迎えた郡の音楽祭。私たち三年生にとっては最後の音楽祭です。とにかく悔いなく、今までやってきたことを信じて歌いました。会場にいる方々を感動させたいという思いで精一杯歌いました。そして最後になるかもしれない合唱を心から楽しみながら歌いました。歌い終えたときは達成感で胸がいっぱいでした。そしてついに、ずっと念願だった県大会出場を私たちは達成することができたのです。

このように私という人間を大きく変えてくれた合唱。何かに夢中になることの素晴らしさ、人とのコミュニケーションの取り方、人の気持ちになって考えることの大切さ、本気になって最後までやり遂げれば、夢は叶えることができるということ。それらは合唱をやっていなければわからなかったことかもしれません。多くのことを学び、考え、私自身大きく成長することができました。ただその陰には、多くの人の支えがあったことを忘れてはいけないでしょう。ずっと本気で私たちと向き合ってくださった顧問の先生。苦しいときも励まし合って一緒にがんばった合唱部員のみんな、こんな私たちを必死で応援してくださった保護者の皆さんや先生方。そんな多くの方々に支えられ、今があると思っています。本当にありがとうございました。心から感謝しています。

飽きっぽい私が三年間本気でやり抜いた合唱。今なら自信を持って言えます。

「私は合唱が大好きです。」

# ワーキングプアを減らすために

只見高等学校２年

渡部（わたなべ）　夏芽（なつめ）さん

ワーキングプアとは、正社員並み、あるいは正社員としてフルタイムで働いてもギリギリの生活さえ維持すること

# グローバリゼーションについて

只見高等学校2年
服部（はっとり） 沙耶佳（さやか）さん

が困難、もしくは生活保護の水準にも満たない収入しか得ることのできない、就労者の社会層のことを言います。現在このような状況にある人が増えていますが、それはどうしてでしょうか。ワーキングプアに陥っている人を減らすためにはどうしたらよいのでしょうか。

私は、ワーキングプアに陥った人に対する職業訓練校での育成、またそのための奨学金制度や優遇制度などのサポートシステムを整えることが必要だと考えます。なぜなら、ワーキングプアから脱却するには、より労働条件のいい会社に「転職」すればいいと考えますが、それがとても難しいからです。

ワーキングプアの増加の原因の中に、日本が、雇用に対する流動性のほとんどない新卒社会であることが挙げられます。「転職」の場合は新卒採用ではないので、中途採用の枠しかありません。中途採用における条件には非常に厳しいものがあり、主に「即戦力となるスキルの高い人材」を必要とした雇用です。しかし、その多くがパートやアルバイトなどの非正規雇用の形態をとっているワーキングプアには、そういったスキルアップの機会がありません。そのため正社員への登用の道がほとんどなく、転職したくてもできないまま、結局また非正規労働に頼らざるを得ない状況に追い込まれてしまいます。その上、生活するための収入がギリギリであれば、アルバイトを掛け持ちし、更に時間を削って働かなければなりません。つまり、ワーキングプアから抜け出すためのスキルを磨くお金も時間もなく、悪循環が続いてしまうのです。

以上の点から、私は、ワーキングプアを減らすために、ワーキングプアに陥った非正規雇用の労働者と、これから社会に出てくる若者に対しての職業訓練等のスキルアップの機会を設けることが必要だと考えます。例えば、ワーキングプアは日本に限らず他の先進国でも問題視されていて、アメリカでは大学に企業の講師を招き、最先端のバイオテクノロジーを格安で低所得者に学ばせることで、地域の安定した労働者に育て上げる取り組みが行われています。また、イギリスでは若者に職業訓練を受けさせ、その期間中は生活費を国で負担し、就職できるまでサポートするなど、国をあげての支援が行われています。これらの対策のように、日本でも、ワーキングプアが現在の日本の深刻な社会問題になりつつあることをよく理解し、国が訓練校に通うための資金や生活費を負担するなどといった支援をもっと積極的にしていくべきです。お金にも時間にも余裕のないワーキングプアには、「悪循環」から抜け出すために外部からサポートしていくことが必要なのです。

もし、このような対策によってワーキングプアが減ったとしたら、どのような社会になるでしょうか。まずワーキングプアから脱却する、あるいは陥らないためにより高い技術を多くの人が身につけることで、国内全体の技術力が上がります。「即戦力となるスキルの高い人材」をしっかりとした土台で育てていくことで、世界にも対抗できるような力を生み出すことができるのです。また、ワーキングプアから抜け出すことができれば、自分自身やそれぞれの家庭に生活の余裕が生まれます。時間に余裕ができると、家族間でのふれあいが増え、少子化対策につながります。さらに、お金にも余裕ができれば、旅行や買い物に多くの人がお金を使うようになり、経済の回復につながっていくでしょう。つまり、ワーキングプアが減ることによって様々な社会問題も連鎖的に解決し、技術や生活の質も向上することで、より住みよい社会になることが考えられます。それを踏まえた上で、私たちはワーキングプアという問題としっかり向き合っていかなければならないのです。

グローバリゼーションとは、「地球一体化」のことです。モノ、お金、サービス、情報、そしてヒトの、国境を越えた移動が活発になり、政治、経済、または文化的な分野において世界的、地球的規模で様々な影響を及ぼすことです。今日、グローバリゼーションが急速に発展している背景には、生産の国際化が進んで貿易が大きく伸びたことや、インターネットの普及で世界中の相手と情報のやりとりが瞬時にできるようになったことがあります。

グローバリゼーションが進むと、国際的分業が発展して、より効率的な低コストでの生産が可能となり、物価が低下して社会が豊かになると言われています。それぞれの国には、特有の気候、資源、自然条件などがあり、生産しやすいものと、生産できてもコストが高くつくものがあります。他の国と比べて有利に生産できるものをたくさん生産し、それを海外に輸出して、自国で生産しづらいものを海外から輸入すれば、お互い効率の良い生産ができます。しかし私は、低コストだけを目指して生産をすることには問題がある

と考えています。

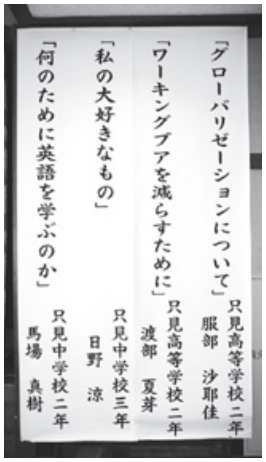
まず初めに、世界的な失業者の増加があげられます。国際的分業が進むと、国内で得をする産業としない産業に分かれてしまいます。得をする産業の中でも、大企業に生産が集中すると、その他の多くの企業は生き残れなくなり、失業者が増加します。

次に、先進工業国と発展途上国の間での経済格差がさらに広がる、ということがあります。工業がさかんではない発展途上国の主な輸出品は、農産物や鉱産物などの一次産品です。一次産品は、その年の気候などで価格が大きく変動するため、工業製品のように安定した収入を得ることが困難です。よって、先進工業国や大企業だけに利益が集中する可能性があります。さらに、大量生産だけを重視すると、環境破壊や児童労働などの問題も拡大してしまいます。

私は、これらの問題を解決した上で、国際的分業を進めるべきだと考えています。失業者の増加を抑える手段としては、一人当たりの仕事量を減らし、多くの人に仕事を与えられるようにする、ワークシェアリングがあります。ヨーロッパではすでに行われていて、特にオランダでは失業率を抑制し、景気回復を達成しています。このように、ワークシェアリングを国際的に導入すれば、失業者の増加を抑えることができます。また、貿易に国際機関が積極的に参入し、発展途上国が不利にならないよう適切な対策をすることで、国と国との経済格差は解消されていきます。さらに、経済大国、先進工業国である日本の役割として、発展途上国への資金や技術の支援を継続して行うことも必要です。最近では、発展途上国の人々の生産物を適正な価格で買い取り、自立を支援する、フェアトレードのしくみが始まっています。フェアトレードのマークがついている商品を買うことで、私たちも発展途上国の経済を支援することができます。

今後はさらにグローバリゼーションが進み、国際的分業は発展していきます。解決しなければならない問題はたくさんありますが、うまく進行させることができれば、世界中で大きな利益を生み出し、国や人々を豊かにすることが可能です。実際に近年、アジアには、グローバリゼーションによって国際貿易が活発になり、著しく経済成長を遂げた国があります。

これらのことから私は、先進工業国や大企業だけが利益を得ることのないよう、一つ一つの問題をしっかり解決し、グローバリゼーションの良さを最大限に引き出していくことが重要だと考えます。


「グローバリゼーションについて」 只見高等学校二年 服部 沙耶佳
「ワーキングプアを減らすために」 只見高等学校二年 渡部 夏芽
「私の大好きなもの」 只見中学校三年 日野 涼
「何のために英語を学ぶのか」 只見中学校二年 馬場 真樹

## 只見町選挙管理委員会 新体制

2月19日に開かれた只見町選挙管理委員会において同委員会の新体制が決定しましたので、各委員を紹介します。
任期は平成24年12月26日から平成28年12月25日までです。
（敬称略）

▽委員長
横山　英彦（楢戸）

▽委員長職務代理者
目黒　友美（二軒在家）

▽委　員
栗城　勝子（只見）

▽委　員
渡部　英弥（黒沢）

## 町職員の退職

○退職町職員（2月28日付）　五十嵐　彩香（教育委員会）